

第7作目「ジョヴァンナ・ダルコ」研修会

「ジョヴァンナ・ダルコ」は1845年2月15日ミラノ・スカラ座で初演されている。

ヴェルディのオペラ初演一覧表は会報「Lirica」に毎回載せている。これを見ると意外な事実が浮かび上がる。

第6作目「二人のフォスカリ」は1844年11月3日初演で第7作目「ジョヴァンナ・ダルコ」は1845年2月15日初演であるから前作初演から僅か約3か月半後である。

この時期、ヴェルディの心境は如何であったのだろうか？

リソルジメント運動に便乗、作品がバカ受けし、作曲依頼がイタリアの主要歌劇場からやんやと殺到する。昼夜兼行作曲に励む。健康面で無理が重なり持病が再発する。そのような状況下、精神状態があやふやになる。そして物心両面で打算的な心に陥る。作曲面では、ロッシーニ、ドニゼッティのような職人的になる。ヴェルディはこの時期を顧みて所謂「苦役の年月 *Anni di galera*」と、自戒している。またワーグナーはこの頃のヴェルディ作品を総じて「ドニゼッティ商会」と揶揄している。



畢竟、この作品は「エルナーニ」「二人のフォスカリ」より著しく後退したが、そこは職人技、観衆をうならす「ツボ」を心得ていて、初演時、ミラノ・スカラ座で成功を収めた。台本はT・ソレーラが、フリードリヒ・フォン・シラーの「オルレアンの少女」を自由奔放に脚色したもの（ジョヴァンナの恋の相手、そして父親の言動等）であり、後々、荒唐無稽と非難され、徐々に忘れ去られ、最近での公演は2015年12月ミラノ・スカラ座であった。

今回の研修会教材は(1989年12月)

ボローニャ市立歌劇場管弦楽団 指揮リッカルド・シャイー

合唱指揮ロマーノ・ガンドルフィ&ピエロ・モンティ

台本テミストークレ・ソレーラ

カルロ(フランス国王シャルル7世)・・・ヴィンチェンツォ・ラ・スコーラ

ジョヴァンナ(ジャンヌ・ダルク)・・・スーザン・ダン

ジャコモ(羊飼、ジャンヌの父親)・・・レナート・ブルゾン

デリル(フランス軍の指揮官)・・・ピエール・ルフェーブル

タルボット(イギリス軍の最高指揮官)・・・ピエトロ・スパニョーリたちである。

* ヴェルディ・オペラのストーリー

プロローグ

百年戦争(1337~1453)が続くフランス。イギリス軍はオルレアンを征服しつつある。

カルロ(後のカルロ7世)は聖母マリアが武器を放棄するようにと言った神々しい夢を